

栗山高に同好会

我がまち唯一の高校を存続させてい。そんな切実な願いから、女子硬式野球に期待を寄せる町がある。

札幌市から東へ車で1時間ほどの栗山町。町内唯一の高校である栗山高で今春、監督1人と選手2人の「同好会」が誕生した。

3人が散らばると、グラウンドがさらに広く見える。十勝地方出身の1年生の辻奈成さんと森乃々花さんは言う。

「町の人がやさしくて、第2の故郷みたい」

町は専門学校の寮を1200万円かけて改修し、高校の女子生徒にも使えるようにした。寮生活を送る2人に町民は弁当を差し入れたり、球拾いを手伝ったり。地元商工会議所会頭が会長を務める後援会も発足し、130社がサポーターに名を連ねるほど力を入れている。

町をあげて歓迎する背景

栗山高女子野球後援会設立総会
栗山高女子野球同好会 激励会

栗山高女子野球同好会の激励会に、野球日本代表・侍ジャパンの栗山英樹監督（左）も駆けつけた＝5月2日、栗山町提供、いずれも同町

寮整備 町・商議所も後押し ■ 選手2人で一歩

には、強い危機感がある。町の主要産業だった角田炭鉱は1970（昭和45）年に閉山し、企業は移転した。町の人口はピーク時の60年前より半減して1万1千人に。29（昭和4）年創立の栗山高も、30年前は1学年240人いた。それが、今年度の入学者は25人にまで減った。

生徒数の減少に歯止めをかけようと、いくつも支援策を打ち出してきた。豪州にホームステイできる派遣事業で優先枠を設けたり、英検などの資格試験の受験料を補助したり。だが、なかなか効果が表れない。

人口減少と若者の流出は町民共通の悩みで、町長選のテーマにもなる。栗山高の存続について話し合う町民らの委員会も「高校が廃校になれば、地域の存続も危ぶまれる」との認識だ。

そんな中で浮上したのが女子野球だった。きっかけは、3年前の車の中の会話だった。

運転していた栗山高OBで、町内で薬局を経営する塩見望さん（53）が廃校の小学校前を通りかかった時、不安を口にした。

「栗山高も危ないです」すると、こんな返事が。



グラウンドに一礼して、練習を始める栗山高女子野球同好会の選手2人。後ろに

「女子野球部を作つて、たら。いま人気なんだよ」「秘策」をくれたのは野球日本代表・侍ジャパンの栗山英樹監督。当時は口野球・日本ハムの監督だった。同じ「栗山」つながりで、25年ほど前から親があり、栗山監督は町内球場を完成させ、少年野球教室や大会が開かれた。

女子野球は初耳の塩見さんだったが、この話に飛ついた。町や若手経済人を巻きこんで動き出す。

先進事例を知ると、立高校で女子硬式野球部創部していた広島県立伯、高知県立室戸、県立根中央を訪問。男子とべ、女子の硬式野球がでる高校は圧倒的に少ない。そんな中、生徒が全国から集まって統廃合の危機も経験した高校があった。祭りのみ、商店街に応援の垂れがかかる様子も知った。

町教委も地域で野球をっている女子中学生の数を調べ、競技人口が伸びていることをつかんだ。内には私立の二つの高女子野球部があったが、「道内の公立高校で初チャンスがあると考えると、将て天塩町出身の金田さん（44）を起用。激励駆けつけた栗山監督もれから2人が歴史を作町に元気を与えてくれず」とエールを送る。

同好会は4月、3人ら活動の一步目を踏み出した。選手を9人以上集「来年は単独チームに」民は預つてゐる。（張